

「ホセア：神の愛とは」

私達は先週、預言者アモスについて見ました。今日は同じ時代に生きましたホセアという預言者を見ていきたいと思えます。時代の背景を説明します。サウロ、ダビデ、ソロモンと続いたイスラエルはソロモンの後に二つの国に分かれました。すなわち紀元前 922年、イスラエルは南ユダ王国と北イスラエル王国とに分裂し、ホセアはこの分裂しました二つの国のうちの一つ、アモスと同じように北イスラエル王国において預言者として活動した人でした。

ホセアが預言者としての活動を始めた時、北イスラエル王国は繁栄の中にあつたのですが、その背後には多くの暴虐と殺戮があり、政治的、宗教的、道徳的に腐敗し、乱れていました。さらにはアッシリアとエジプトという二つの強国に挟まれており、そのアッシリアによって滅ぼされる日が着々と近づいてきていました。そのような時に預言者ホセアは神様からの言葉を受けて、民に警告を語り続けていたのです。

ホセアが預言者としてののはたらきを始めるにあたり、神様は彼に向かってこんな驚くべき言葉を語りかけました『「行って、淫行の妻と、淫行によって生れた子らを受けいれよ。この国は主にそむいて、はなはだしい淫行をなしているからである」。3そこで彼は行ってデブライムの娘ゴメルをめぐらした。彼女はみごもって男の子を産んだ』（ホセア1章1節－3節）。

それは耳を疑うような言葉でした。ホセアは真実に神に仕え、自らの結婚ということについても理想を掲げていたことでしょう。しかし、神様は彼に不品行の只中にある女ゴメルを妻として迎えよ、さらには彼女が淫行によって得た子供をも迎えなさいというのです。

どれだけの葛藤がホセアのうちにあつたか分かりませんが、ホセアは神の言葉に従い、ゴメルを迎え入れ、結婚生活が始まり、やがて三人の子供がゴメルから生まれますが、一番目の子について聖書は「彼に男の子を産んだ」（ホセア1章3節）と記していますが、二番目、三番目については「産んだ」（1章6節、8節）とだけしか書いていません。おそらく、この二

人の子達はホセアの子ではなかったのでしょうかかもしれません（2章2節-5節）。

結婚生活は互いに対する愛と信頼がなければ踏み出せないものと誰もが思うところですが、よりによってなぜこのような女性を妻としると神様はホセアに言われたのでしょうか。主は言われます。「行って、淫行の妻と、淫行によって生れた子らを受けいれよ。この国は主にそむいて、はなはだしい淫行をなしているからである」（ホセア1章2節）。神様はホセアが預言者として立つにあたり、淫行の妻の夫となることにより、イスラエルに対する神の思いというものを悟らせようとされたのです。

彼らの結婚生活がどんなものであったか細かいことは記されていませんが、ホセアはゴメルを妻としたかぎり、彼女を愛したことでしょう。きっとしばしの幸せな日々を過ごしていたのでしょうか。しかし、やがてゴメルはホセアと家庭を捨てて家を出、かつて彼女が身を置いていた世界に戻っていきます。

言うまでもなく、このことはホセアの心をズタズタに切り裂きました。ホセアの家族、親戚はきつと言ったことでしょう「ほら見たことか。私達が言ったとおりではないか」。その深い傷を抱えているホセアに神様はさらに驚くべきことを語りかけます「あなたは再び行って、イスラエルの人々が他の神々に転じて、干ぶどうの菓子を愛するにもかかわらず、主がこれを愛せられるように、姦夫に愛せられる女、姦淫を行う女を愛せよ」（ホセア3章1節）。

ゴメルはホセアとの契りを破り、彼と家庭を裏切り、出ていったのです。そんな彼に神様は自分のもとを離れて他の男達の所へ行き、そこで彼らの所有となっているゴメルを連れ戻しなさいと言われるのです。なんということでしょうか。いったい聖書という書物はなんということを書いているのでしょうか。ホセアはこれらの言葉を受けて、どうしたのでしょうか。2節以降はこう記しています。そこでわたしは銀十五シケルと大麦一ホメル半とをもって彼女を買い取った。（ホセア3章2節）。

ホセアは神の言葉を受けて、妻を買い取ったというのです。ゴメルは売春宿のような所で誰かの所有となっていたのでしょうか。おそらくバアルとい

う偶像の神々を祭る神殿の娼婦としてその身が拘束されていたのだらうと言われています。彼女はそこから逃れることができないように、理不尽な負債を負わされ、ホセアはその彼女の負債を支払い、彼女を買い取ったのです。そして、彼女に語りかけました。「あなたは長くわたしの所にとどまって、淫行をなさず、また他の人のものとなってはならない。わたしもまた、あなたにそうしよう」（ホセア3章3節）。

ホセア書が私達に語りかけることは何でしょうか。この書は古の夫婦の感動的な夫婦愛について語っているのではないのです。ホセア書が私達に伝えるそのメッセージは、この一組の夫婦の関係は神様とイスラエルの関係だということなのです。

聖書を読んでいますと、神はイスラエルという国を選ばれたということが分かります。その選びはイスラエルが他国に比べて何か特別に秀でていたからではなく、反対に彼らは小さく、そして弱い国でした。そのことは申命記7章6節から8節にもはっきりと記されています。

6 あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた。7 主があなたがたを愛し、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの国民よりも数が多かったからではない。あなたがたはよろずの民のうち、もっとも数の少ないものであった。8 ただ主があなたがたを愛し、またあなたがたの先祖に誓われた誓いを守ろうとして、主は強い手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手から、あがない出されたのである。（申命記7章6節-8節）

イスラエルと神との関係はまさしく夫婦のようなもので、互いに対する真実な誓いのもとにその関係は成り立つはずでした。しかし、その誓約をイスラエルは何度も破り、彼らは偶像の神々のもとに何度も何度も向かいました。それは神に対する霊的な姦淫だということを、神はホセアとゴメルとの関係によって明らかにされたのです。

「偶像崇拜」とは私達が神々として崇める対象だけを指すのではなくて、神に心向けずにそれ以外のものを神以上に求め、崇める時にそれらのものは私達の偶像となります。このように考えますのなら、私達の人生は常に何かしらの偶像に従って生きているようなものです。こうなりますとホセア書の物語は他人事ではなく、私達に関係する物語なのだということに気がつかされるのです。

ホセアを捨てて、別の男達のもとに出て行き、そこで淫行の限りを尽くしていたゴメルに対してホセアが自らのもとに立ち返るようにと彼女のもとへ行ったように、イスラエルを自分のもとに立ち返らせようと神様は何度も何度も、彼らに愛と憐れみを注ぎ続けたということが聖書には記されています。しかし、それでも彼らは繰り返し、繰り返し、神のもとを離れたのです。ホセアはイスラエルに対する、その神の愛とあわれみをこのように記しています。

1 わたしはイスラエルの幼い時、これを愛した。わたしはわが子をエジプトから呼び出した。2 わたしが呼ばわるにしたがって、彼らはいよいよわたしから遠ざかり、もろもろのバアルに犠牲をささげ、刻んだ像に香をたいた。3 わたしはエフライムに歩むことを教え、彼らをわたしの腕に抱いた。しかし彼らはわたしにいやされた事を知らなかった。4 わたしはあわれみの綱、すなわち愛のひもで彼らを導いた。わたしは彼らに対しては、あごから、くびきをはずす者のようになり、かがんで彼らに食物を与えた（ホセア 1 1 章 1 節-4 節）。

ホセアの後に生きた預言者イザヤもその神様のお心について記しています『わたしはわが名を呼ばなかった国民に言った、「わたしはここにいる、わたしはここにいる」と。よからぬ道に歩み、自分の思いに従うそむける民に、わたしはひねもす手を伸べて招いた』（イザヤ 6 5 章 1 節と 2 節）。

神様は自らの罪ゆえに自由を失い、奴隷のようにになっているイスラエルのあごからくびきを外す者のようになり、食卓につくことができないほどに弱っている彼らのためにかがんで食物を与えたというのです。それでも神様のもとを離れていくイスラエルに何度も「わたしはここにいる、わたしはここにいる」とその手を差し出してきました。しかし、彼らはその語り

かけをことごとくはねのけて、神様の彼らに対するこれらの思いを無としてきたのです。まさしくそれはホセアに対するゴメルの姿だったのです。

主にある皆さん、罪とは犯罪を犯したとか、ひどいことしたということだけが罪なのではありません。差し伸べられている手をはねのけることだけが罪なのではありません。差し伸べられている手、かがんで与えられている食事を与えてくださる主を無視し、好き勝手に生きている、それが罪なのです。

しかし、神様は決して彼らを見捨てることはありませんでした。ゆえにホセアに語ったのです。「わたしがそのようにイスラエルに対してなしてきたように、あなたもゴメルを愛しなさい」と。私達はホセアと同じ人間としてホセアがゴメルに対してなしたことがどんなに難しいことであり、およそ普通では考えられないことかと思えます。まさしく、それは規格外の愛なのです。

もし、私達が心に手をおいて自分と神様との関係を考えますのなら、それはゴメルのようなことなのだということに気がつかされていきます。他の神々に目を向けるとはご神体と呼ばれるものを拝むということだけではなく、本来、そこには神様だけがあるべきなのに、まさしくその神様が眼中にないかのように、それ以外の諸々のことに心が奪われてきたとするのなら、それはゴメルが我が夫、ホセアに愛を注ぐべきなのに、そうせずに他の男達のもとに出て行ったということと同じなのです。

神様はイスラエルにそうであったように、そんな私達に何度も何度も手を差し伸べて「わたしはここにいる」と語りかけていてくださっています。しかし、私達はそのことに目が閉ざされ、気づくこともなく、否、気がついていてもその言葉に耳を傾けずに生きているというのが私達、人間なのだと言書は言うのです。

ホセアはゴメルのために代価を払いました。本来、それは払う必要もないし、彼が彼女を買い戻さなければならない理由はないのです。彼女が家庭を捨てて再び娼婦となったのは彼女の責任であり、そのまま心身ともに害してしまい、人生を閉じて仕方のない者なのです。しかし、ホセアは彼

女を愛し、再び彼女を妻として受け入れたのです。そう、彼はゴメルのために代価を払い、彼女を自分のもとに買い戻したのです。

私達はこのホセアの愛に驚き、怪しみます。そして、何を隠そう、この同じことを私達のために成してくださったのがイエス・キリストの十字架なのです。聖書は私達は皆、神の前に罪人だと言います。負債を負わされたゴメルが自分でその負債を完済して、売春宿から逃れることはできなかったように、私達は自分の罪を自分で帳消しにしたり、代価を払うことはできないのです。しかし、そんな私達の人生の負債をイエス・キリストは自らの命という代価をもって、全て帳消しにしてくださったのです。

ホセアがなしたことに私達は驚きますが、イエス・キリストが私達のためになしたことはそのことに比較できるようなものではありません。ホセアは銀と大麦でゴメルを買い取ったのですが、イエス様が私達のために支払われた代価はご自身の命だからです。「ゴメル、良かったな。優しい旦那さんがいて。普通、そんなことあり得ないよ」と感心している場合ではないのです。他人事ではないのです。それ以上のことを主イエスは私達になしてくださったのですから。

私達の罪は教えや信条によって解決するものではありません。このために神は常套手段をとりました。神のひとり子は、天の栄光を捨ててこの地に下り、十字架においてその尊い命を我々のために捧げることにより、その愛を実証してくださいました。

ホセアは何度も何度もイスラエルに手を差し伸べていた神について書き記しています。しかし、彼らはその手を握ることがありませんでした。ホセアもゴメルを愛し、妻でありながら他の男の子を産んでも、その手を差し伸べ続けました。しかし、彼女はホセアの思いを知らなかったのです。ホセアは書いています。『彼らのおこないは彼らを神に帰らせない。それは淫行の霊が彼らのうちにあって、主を知ることができないからだ』（ホセア5章4節）。

ゴメルはホセアの愛を知りませんでした。ですからホセアと家庭を捨てて、闇の中に身を置いたのです。なぜ、彼女はそんな愚かなことをしたのでしょうか。ここに記されているように淫行の霊が彼女を突き動かしていたと

しかいいようがありません。そして、それゆえに彼女はホセアの愛を知ることができなかつたのです。

しかし、ホセアは神に示され、その代価をたずさえてこの妻を買い戻しに行きました。ゴメルは自分のためにやってきた、夫を見た時にそのホセアの愛を知ったのです「あなたは長くわたしの所にとどまって、淫行をなさず、また他の人のものとなつてはならない。わたしもまた、あなたにそうしよう」（ホセア3章3節）という言葉がはじめて、彼女の心に届いたのです。

そう、ゴメルはホセアの愛を知ったのです。ゆえにホセアは書きます。神が私達に対してどんな思いをもっているのかを知ることがどんなに大切なことであり、主を知ることの力と祝福をホセアは知っていたのです。

『わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることが求めよう。主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される』（ホセア6章3節）。

キリストの弟子の一人でありましたヨハネはこのイエス・キリストについて書いているではありませんか。『主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った』（ヨハネ第一の手紙3章16節）。イエスの12弟子の中で最年少でありましたこのヨハネだけが十字架に磔にされてイエス様を見た人だと言われています。そのヨハネが十字架のイエスを見た時に自分ははじめて本当の愛とは何なのかということを知ったというのです。

主にある皆さん、ゆえに私達も主イエス・キリストが私達のためにしてくださったことを知りましょう。神などいないかのように生きていた。しかし、神はその一人子をお与えになるほどに我々を愛された。それは規格外の愛です。その愛が私達に注がれているということ、それを知ること、そこから全てが始まるのです。ヨハネも書いているではありませんか。『永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたが

つかわされたイエス・キリストとを知ることであります』(ヨハネ17章3節)

結局のところ、私達の人生に必要なのは神の規格外の愛です。それを知ることです。この愛を知る時に私達の生き方はその愛を知る前と後では異なるのです。私達、人間の人生とは実にそのところ、すなわち自分は愛されているのか、否、愛されていないのか、そのところにかかっているからです。愛されているということを知る時に、私達が抱えている多くの問題は解決されていくのです。お祈りしましょう。